

の入ったスープ（塩汁）とシヤブシヤブの雑穀粥が飯盒のふたに一杯、だから昼食用の黒パン三百グラムも食べてしまう。工場の中の作業では焼き上がった煉瓦を倉庫へ一輪車で運び出す。十分積まないとソ連人の監督が怒鳴る。空きっ腹に一輪車運搬はこたえる。こうして一日が終わる。

冬期の労役

大地が石のように凍り川の水も凍りついて、その上をトラックが楽々と通れる厳冬になると山へ伐採に入った。

火力発電所の燃料になる松材の伐採で現場には半地下式の小屋があり、ここに寝泊まりする。衣服は現地人の着る綿の入った労働服だった。

積雪の中で直径五〇センチから一メートルもある松の巨木を二人挽きの鋸で挽き倒して枝を払う。この作業も重労働だった。相変わらず食料は乏しい。抑留二年目もこのような労役が続いた。

内地帰還

昭和二十二年四月下旬、ナホトカに入った。五月上旬、日の丸の旗を掲げた引揚船が港へ入って来た。本

当に帰ることができるのだ。思わず「萬歳」と叫んだ。数日後舞鶴港へ上陸した。

牛きて日本へ帰れた。

初夏の風が嬉しかった。

思 い 出

滋賀県 水野清一

奉天の社宅の庭は明るかった。私たちは結婚して一年半、長女の由紀子が誕生して、やっと半年になったところだ。戦時下と言っても新婚生活は楽しいものであった。そうした中へ二度目の召集令状が届けられた。入隊先は撫順の第四百十旅団の通信隊であった。昭和二十年七月、終戦一カ月前のことであったが、妻子と友人に付き添われて元氣に入隊したのであった。

まず入隊して驚いたのは、この軍隊には兵隊が一人もないことであった。集まったのは中隊長以下全員

が下士官要員だけの軍隊であった、即ち、まだ編成途上の軍隊の形をなしていない部隊であったのだ。毎日することもなく、下士官が飯上げ当番などをして暮らした。そして間もなく一カ月後に終戦を迎えたのであった。そして、その前にソ連参戦があったのである。

部隊はある夜非常召集によって集められ、ソ連軍の参戦を知った。そして直ちに夜行軍で奉天の北陵へ移動をした。奉天がソ連軍と戦う第一線であったからである。

奉天に移動して間もなく、私は奉天の衛生材料廠へ衛生材料の受領に行った。そして、そのとき、終戦の玉音放送を聴いたのである。その日は騒然とした状況の中で、仕事もそこに帰営したのであった。

私たちの部隊は、それから一週間ほどたつて武装解除され、抑留地への旅へと出発したのである。北上する列車の窓から、大切にしていた勲章を捨てたりして、誠に不安な道中であった。そして列車の到着した集結地は北満の黒河であった。夕闇の中でアムール川の流れが不気味であった。川の表情にも言い知れぬ不安が

ただよっていた。渡河をするために部隊は河岸に夜営をして順番を待った。対岸のブラゴエシチェンスクの灯が、川面にうつつて、不思議にきれいに見えた。

ブラゴエシチェンスクに渡ってから、しばらく地上に待機する時が流れた。そのころからソ連兵による盗難が横行しだした。あちこちで闇の中に「ボール、ボール」の聲が聞かれた。

私たちは貨車に乗せられた。様々な憶測はあったが、私たちを乗せた貨車は、確実に西へ走って、やがて着いたところはバイカル湖畔の街であった。あとで知ったことだが、この街はスリュージャンカという街で、スリュージャンカとは雲母の街という意味だそうだ。雲母のことをスリューダと言い、スリューダの街、スリュージャンカは正に雲母鉱山の事業によって成り立っている街である。私たちの収容所はこの街はずれにあり、これから三年間をこの鉱山に働くことになったのである。

スリュージャンカ第十四収容所、これが私たちの収容所で、約千名の日本人が抑留されていた。この収容

所は、イルクーツクの管轄であった。作業の第一は雲母の採掘であった。作業は露天掘りが主であり、山の岩盤をくずすのと地上の雲母を拾うことであった。また、岩石を捨てるトロッコ押しも重要な仕事の一つであった。そして、一日に百パーセントに達するには、トロッコ二十台をpushさねばならなかった。こうした作業になれて行くにつれ、上手に作業する道も覚えていった。朝ごとに人員点呼をし、収容所を出て鉾山に向かい、終日山に働き日没と共に収容所に帰る。この繰り返しの中で楽しみは何と言っても食事である。しかし主食は燕麦か粟で、米の飯などは病気にでもならなければ、食べることはできない。そしてこうした食事の作業のノルマによって、差がつけられるのも悲しいことであった。収容所の中でも特殊技能者は優遇されたので、大工や鍛冶工、靴工などは優位であった。こうしたことも、私には無縁のことであった。

シラミの発生は、どこでも困ったようだが、私たちの収容所でも同様である。月二回の入浴は楽しみであり、街の入浴場へ行くのである。このときは市中を散

策する気分になるので心も明るくなった。スリュージャンカの街は、田舎街ではあるが、街の十字路にはスピーカーでクラシック音楽が流されていた。音楽好きはソ連の人々の国民性であろう。

スリュージャンカにて三カ年が過ぎた。このころになると、日本との交信も許され、「俘虜用郵便葉書」が配布された。私は他人の分までゆずり受けて、せつせと日本への通信を書いた。帰国後、家に届いた分をしらべたら十六通あった。しかし妻からの返信はわずかに一通手元に届いたのみであった。

三度目の昭和二十三年の春も過ぎたころから、収容所の中にもダモイの話題が流れるようになり、やがてそれが真実のものとなっていったのである。私たちは歓喜の声をあげ、噂も現実となり、帰還の日を迎えたのである。

帰還の日は、スリュージャンカの駅から貨車に乗った。貨車は、今度は確実に東へ向かって走った。そしてナホトカに着き、最後の行進を元氣に行い、迎える「第一大拓丸」に乗船し、帰還したのである。